第１回豊明市総合教育会議　会議録

日時：令和５年１２月２７日（水）午後２時００分～
場所：豊明市役所 新館４階 第１委員会室

構成員

市長	：小浮　正典
教育委員会　教育長	：藤井　和久
同　教育長職務代理者	：長山　加代子
同　委員	：青木　睦
同　委員	：井戸　貴子
同　委員	：南　　寿樹

事務局

行政経営部長	：小串　真美
秘書広報課長	：伊藤　克代
秘書広報課長補佐	：加藤　良子
秘書担当係長	：安藤　裕子

関係部局

教育部長	：髙木　安司
学校支援室長	：山田　秋男
学校教育課長	：秋永　亘正

（欠席者なし）

市　長　　教育委員の皆様には本当にたくさんの仕事をしていただいている。今日もいつもと同じように、たくさんのご指摘、ご助言をお願いしたい。全てについて、子ども目線で、子どもの立場に立った状態で、いろいろな議論をし、そして自分たちの施策が前進することを願っている。

大谷選手から届いたグローブについては、学校としては万が一紛失してしまっては困るなどと考えてしまうかもしれないが、子どもたちは使いたいと言っているので、ぜひとも使ってほしいと学校にお願いしている。

教育長　　今年１年間、教育委員会に対して様々なご支援、ご協力いただきあ

りがとうございます。特に今年はいろいろなことがあり、緊急的な対応もしていただき、本当に感謝しております。今日は教育委員と市長と実際に膝を割っていろいろな話ができればと思う。また要望事項だけではなくて、教育以外にも図書館とか、生涯学習とかいろいろな分野もあるので、全ての面において市長との懇談をしたいと思っている。

事務局　　本日は傍聴希望がないため。引き続き進行。
※会議の進行が事務局から市長へ移行

２　議　題
（１）教育委員会学校訪問にかかる報告について

委　員　　１番要望が多かったのが、特別教室のエアコン設置である。特に今年は猛暑で、どの学校でも特別教室が上のほうの階にあるため、より暑くなった。次に学校への侵入事件があったため、正門のオートロックの要望と、あわせてオートロックをかけることによるインターホン設置要望や、教室間でのインターホンの設置要望も、複数の学校からあった。

他にはＧＩＧＡスクールのタブレットの修理費用や、バッテリーの交換費用がかかるという話も聞いた。学校訪問で見る限りは、あちらこちらでタブレットを活用しているという状況にはちょっと見えなかったが、先生方からは研修や勉強会を行っていると聞いたので、まだ模索をしている段階であるというように感じている。それに関連して、電子黒板やプロジェクターが整備されていくと先生方もタブレットの活用ができるのかなと思っている。タブレットを持ち帰って活用することがまだできてないと感じている。

協同の学びについて、何年か取り組んできているが、子どもたちの話し合いを基にそこから学び合いをしているかというとそこまではまだできていないと思うので、学び合いのことについてももう少し改善していくところがあると感じる。

最後にコミュニティースクールもまだ模索中というところで、どこの学校もコーディネーターがいてしっかりと地域と連携しているかというとまだそうではないので、コーディネーターを増やすべきなのか、または地域に合ったコーディネーターをつけるべきなのかわからないが、コミュニティースクールも、もう少し改善をしていって、地域と学校が一体になった学びや教育ができるとよい。

市　長　　コミュニティースクールについては、どこの地域も本当に役職者の

成り手がおらず、80歳に近いご高齢の方や、数人の方々が何とか各地域の活動をしていただいている状態であり、学校側の問題というより、地域側の問題としてコミュニティースクールに踏み込んでやっていけるだけの体力がなくなってきているという問題がある。一方で、子ども食堂はどんどん広がっている状態で、新しい担い手が出てきている。長年子ども食堂をやってきた人の話では、地域につながりがない人たちは、子ども食堂が緩やかな空間だから行けるが、それをかっちりした空間にするとハードルが高くなるため、学校や区などしっかりとした組織につなげないほうがいいと言う。みんなが何かやっているからやってみようかなという低いハードルでやっていかないと、と市も感じている。区長や町内会長などの地域の担い手だけでなく、それ以外の担い手ともつなげていかないと、なかなかこのコミュニティースクールは進まないのかなと考えている。子ども食堂やカラットを中心としたイベントもこの２年ぐらいで進んできている。一方では衰退してきているけれど、一方では盛んになってきている。コミュニティースクールについては、目標を立ててこの年限までに何かをしようということをやるのは難しいので、学校側も地域側もそれぞれがウィン・ウィンの状況のレベルで取りあえず進めていく。

教育長　　電子黒板の予算は来年度は中学校でとっている。特別教室や相談室のエアコンについては、今年度は７月ぐらいから９月いっぱいまで特別教室が暑さで使えない状況だったため、何らかの対応が必要な時期になってきている。

協同の学びについては、小牧から来ている先生も含め教員のＯＢで関心がある先生がいるので、徐々に切替えて、少してこ入れをする必要があると考えている。

コミュニティースクールは、コーディネーターと学校の教員の方では、なかなか地域に入っていくのは難しいので、地域で区の区長などをやっていたＯＢの人などを通じて学校に関わってもらい、学校をどうしたいのかという話から始める必要がある。つなぎ役として共生社会課があるので、人脈により、成功事例をつくって、ちょっとずつつなげていきたいと思う。

ＧＩＧＡスクールの関係は、やはり持ち帰って活用することが話題になる。例えば夏休みの宿題を紙ではなくタブレットで行うなど大胆に切替えていかなければならないと考える。活用している先生もいらっしゃるので、活用する先生が増えてくると必然的に使うようになる。子どもがとにかく上手に使っているので、今後、間違いなく動いていくと思っている。

委　員　　特に今年インフルエンザなどで、学級閉鎖になる時期が結構早かったため、こういう時にはこれを持ち帰ってやったほうがいいということをしっかり決めていけば、もっと活用できるのかなと思う。

市　長　　コミュニティースクールについてもう一言、舘区や坂部区は地域の集会所が狭いため、大きなイベントは舘小学校や豊明小学校で行っており、どちらも学校の先生と区のサロン活動をやっている方や区長との距離が近く、学校と地域のつながりが強い。集会所が足りていないために、学校を地域の交流拠点にしたら、つながりができ、交流が進んでいく。学校の先生に負担がかからない状態で、地域の人たちが一定程度、子どもたちと交流し、見守る状態となるので、自分としてはそのようなところにも期待をしている。

委　員　　そのような交流に子どもたちがどんどん参加していけるようになるとよいと思う。

行政経営部長　　正門のオートロックは令和７年度まで補助金が２分の１ぐらい出るという話があるので予算の再協議を行っている。

教育部長　　特別教室のエアコンについては、使用頻度の高いところからまず先行して設置する予定である。ただ、使用頻度が低くても使う部屋は使う。全てには設置できないため、学校としてどこを優先されるのか決めていただく。予算上、全ての学校を一度にはやり切れない。

委　員　　学校の危機管理システムについて。体育の授業中に体育用の器具が子どもの顔に当たり、顔の一部の皮膚が切れてしまったということがあり、縫うと痕が残るからと痕が残らないような処置を学校で行い、親に迎えと病院の受診をお願いしたという学校の対応があったとのこと。学校からおわびに伺うのではなく、保護者に来てもらうという対応であり、保護者が仕事を持っていたらどうするのかと。学校の対応に保護者は不信感を持つのではないかと思った。そして聞くところによると、同じ体育の授業で子どもの顔に当たった後にも膝に当たったということがあったそうだ。それは絶対にあってはいけないことであり、二度とこういう事故が起きないようにする対策が、少し甘いのではないかと思う。福祉の職場などでは、事故にはならなかったけれども、ヒヤリとした案件を発表するようなヒヤリハット報告というのがあるので、そういった報告が必要だと思う。学校の中で報告もなかったという話を聞いたり、学校支援室は聞いてないということがあったので、疑うわけではないが隠すということはせず、学校の中で起きた

事故を報告し、ちゃんと生かしていけるようなシステムをきちんとしてほしい。二度と起こさないという意識を高めるべきである。

もう一つは、北部と南部の教育支援センターが学校との連携がうまくいっていないと感じる。提案として福祉の現場では、その子どもが１番相談しやすいところを中心にして、関係者調整会議のようなところでヘルパーさんや事業所などいろいろな関係者に、今この子はこういうことで悩んでいるという情報を共有するようなことを行っている。そのような情報共有を支援センターと学校で行えたらよいかと思う。学校から全然指示や連絡がなく任せっきりではないかという話を聞いたが、連携ができるようなシステムをどこかがリーダーシップをとって行い、学校に行けないと悩んでいる子どもをしっかり支援する体制をつくっていくということが、おそらく今しっかり出来てないと感じる。

市　長　　ある病院では、ヒヤリハットの事例は、医者も薬剤師も看護師も一定の割合で必ず生じるものであり、たくさんの事例が委員会で取り上げられる。件数が減っていると、逆に隠している状態になっているとみなされ、ペナルティーを受けるというシステムとなっているようである。だから本当に隠す状態になっているのなら、非常に危険な状態である。きちんとその報告を組織として共有しないと、再発防止に絶対につながらない。その後、やり過ごすだけになってしまう。

教育長　　学校支援室は詳しい報告は、学校から受けているのか。

支援室長　　詳しい報告は特に受けてはいない。

教育長　　事故があったときは基本的には教育委員会の支援室へ案件が上がってきて、毎月校長会などで、今月こういうことがあったという報告をしている。しかし今回のこの件に関しては、確かに詳細が伝わっておらず、聞くところによると事故が起こる前から学校と当該保護者との関係性があまりよくなかったようであり、学校のことはあまり信用していなかったようである。ちょっと不審に思っているところに、さらに学校側の対応が非常に安易な対応だったので、さらに不信感を抱いてしまっている。

市　長　　事故の情報はしっかりと上げないといけない。ヒヤリハットをちゃんと共有した状態で再発防止をさせないと、同じことが絶対起きてしまう。

教育長　　学校に詳細を聞き、次回の定例教育委員会のときに再度報告する。
フレンドひまわりのことに関しては、全ての学校の教員がフレンドひまわりの実態をよく知っていて、連携がとれているかというとそうではない。ただ、一定程度はある程度連絡をとっている人もおり、フレンドひまわりに通っていなくても教員が個別に、不登校の子の家に関わっていることもある。今年は特にフレンドひまわりに通う子が少なく、例年７、８人ぐらいは登録しているのが、今年は１人とか２人と非常に少ない。しかし、その割には実は不登校の子は増えており、小中学校合わせて150人ぐらいいると思うが、どこにも行けていない子がいるのではないかという心配があると思う。一方で別室登校という、教室には入れないけれども、別の教室に入っていっている子がたくさんいるという話も聞いている。学校で独自にその教室に名前をつけて、PRのためにパンフレットをつくり、保護者にここでもいいから来てくださいと伝える取組をしている学校もある。今、どちらかというとフレンドひまわりよりも別室のほうが、私も別室だったらいけるかなという感覚で、ニーズとしては増えているような印象がある。フレンドひまわりにも行けなくて、家にひきこもっている子も一定程度いる。それに関してはその子だけでなくて、家庭の問題などいろいろな問題があって、なかなか簡単には解決出来ない。どういう形で今後対応していけばいいかというのは、すぐにいいアイデアは浮かばないが、来年できれば、別室登校を専門に担当する教員を配置したいと考えている。別室専門に担当する教員が今はいないので、手のあいている先生が入れかわり立ちかわり入ってきて見守っているが、やはり常時一定時間子どもたちの様子を見て、変化に気づけるような教員を配置したい。小学校では先生が皆授業に出ており、校長先生が見守ることもある。不登校の問題は奥が深く、これという正解がなく、いろいろな方法を提案しながら、いろいろな人の意見を聞きながら取り組んでいきたい。また、子どものフォローも大切だが、不登校の子どもを抱えている保護者のフォローも行いたい。そこには、ほぼ手を差し伸べられていない。不登校だった人が経験談を話す場をつくり、そういった人に話をしたり、話を聞いたりという場を設けたい。自分が中学校ではこういう思いだった、親に言われてこう思ったなど、やはり経験した人の体験談には説得力があると思う。つながる部分は結構あると思うので、若い頃不登校で今普通に社会生活して社会人として活躍している人がいるので、そういった人を通じて支援をしていきたいと考えている。

委　員　　例えば、悩んでいるときにこの人なら相談できるかなというところ

を１か所でもつくれば、相談を受けた人が中心になって、また支援のネットワークができるのではないかというふうに考えている。だから、１人で孤立しているということは、なかなかその相談に行くハードルが高いという意識を持たれているのではないかなと思う。しかし、なかなか担任も忙しいし、フレンドひまわりに行くのもどうしようかな、そういうふうに二の足を踏んでいる子たちがもしいるならスクールカウンセラーなどが子どもをフォローすることが出来たらなと思う。ちょっと担任には過重負担かなと思っている。

市　長　　模索しながら変えていくしかない。フレンドひまわりもずっとこうだったからこうあるべきということにこだわる必要もなく、子どもたちが求めているものを提供していかないといけない。子どもたちに来てもらって、つながってもらわないといけないが、そういう場になっていないのなら、その在り方を考えていかないといけない。

全然学校に行っていない、どこにも行けない子どもたちが、ある新聞店の四輪駆動のサーキット場には来ることができているそうで、オーナーさんは何か社会貢献しているという感じは全くなくて、取りあえず来たいなら来ていいよというそれぐらいのゆるさでやっている。極力本当にゆるい状態にしないと、なかなかハードルを越えられない子もおり、ゆるい選択肢がいくつかある状態だと、これには自分が参加できるということが見つけられていけるのかなと思う。いくつか選択肢が増えていく状態にしていきたい。

委　員　　コロナが落ちついたので、学校訪問に行ったときに子どもたちの活気が戻ってきて、学校の雰囲気がとてもポジティブな方向に向かっているのを感じた。文化祭など今までなかった行事が行われるようになり、マスクを外せるようになってきて、お互いの表情が見えるようになったことは子どもたちにとっていいなと思う。特に小学生の子たちは、とても子どもらしくなったなと感じる。コロナで何かおとなしくしていないといけない雰囲気を子どもなりに感じ取った状態で授業を受けたり、給食の時間を過ごしたりしていたのかなと思う。

今年度はインフルエンザがかなりはやり、学校を休まないといけなくなったときに、せっかくタブレットがあるのにリモート等で授業を受けることができない。中学校３年生のようなちょっと気持ちも焦っているような学年の子がお休みで１週間行けないよとなるのはもったいない。せっかくタブレットが入ってリモートもできる環境を調べているはずだができていない。できない理由を学校のほうに聞いたところ、教員側の準備ができていないというのが答えであり、多分リモートでつないだときに何をしたらいいのかとか、どういうふうにしたらいいのか分からな

いとのこと。それをでもやらなければ始まらないので、やってほしいと学校には伝えた。そういった教員の分からないというのを、どうやってフォローしていくのかを考えてあげないといけないとＩＣＴのことに関しては感じている。

施設管理について、学校は古いところが多くなってきており、本当に修繕するところだらけになってきている。ただ、先生方と学校内を回っているときに先生方がぽろぽろと「これは子どもにとって危ない、これが落ちてきたらどうするのかと何年も前から言っているが直らない」とおっしゃる。先生方も修繕の優先順位を多分言われていると思うが、なかなかそこの修繕に対して学校側と市側がうまくいっていないのかなというのがちょっと不安になった。

働き方改革と先生方も言われている中で、例えばトイレが新しくなりとてもきれいになったが、子どもたちだけの力ではせっかくきれいになったトイレをきれいに継続していくのは難しいのではないかと感じた。今までがちょっと古いトイレだったため、多少汚くてもまあしょうがないというふうに見えてしまっていたのではないかと。しかしこれでは、早くにあまりきれいじゃないからトイレに行きたくないというふうにまた戻ってしまうのではないかと感じる。多分清掃時間を減らすなど、いろいろその辺もちょっと働き方改革により変わってきている部分があると思うが、そういったちょっと難しい部分をどうしていったらいいのか。他にも校内のいくつかあまり使われていない教室などは先生方が片づけるのか、それともＳＳＳに頼むのか、コミュニティースクールについても、誰かと一緒になって何かを企画することも、誰も考えていない様子を感じる。誰かが手をつけると自分は気になるけど、自分が手をつけたら自分がやらなきゃいけないというふうに感じるというそんな状態になっている学校があるのではないかといくつかの学校で感じた。そこの部分に関しては、もうちょっと学校も考えなければいけないし、難しいところかと思う。働き方改革で教員のやるべき仕事みたいな言われ方もしているが、それでいろいろなことが除外されてしまうのはまた違うし、民間で考えれば自分の職場の環境整備をするのは当たり前のことなので、そういった面でちょっと残念かなと思う学校も中にはあった。

コミュニティースクールに関して、コミュニティースクールは本当に各学校それぞれ違うのと、小学校においておやじの会があるところとないところでは、ちょっと違うのかなという気がする。ある小学校ではコミュニティースクールを通じて、学校の困っていることを話してそれを助けてもらったということがあったようだ。どの方をコミュニティーのメンバーとして選出するのかということと、どういう在り方がいいのだろうということも悩み続けながらではあるのかなという気はする。コミュニティースクールで区長さんたちがお話しされているＰＴＡさんはあ

まりそこには関わっていない、学校も教員は多分コミュニティースクールにあまり興味はないというようなちょっとばらばら感があるので、もちろん継続していく中で、何らか形は変わっていくとは思うが、やっぱりどこかで、いいモデルが出てくるといいのかなと思う。

不登校のお話は先ほどちょっと出ていたが、中学校においては各学校約30人ずつ不登校の子がおり、約１クラス分の人数である。30人ずついる中で、フレンドひまわりに行っている子と別室に行っている子といて、今は別室が多いようである。学校としては、子どもに合わせて、学校に足を踏み入れるのも難しいという子たちにはフレンドひまわりがありますとお話しされ、時間的に朝からきちんと行けないが、気分的に行けるとなったときには別室に行く子もおり、両方必要であるという。先ほど教育長がおっしゃっていたように、別室へは代わる代わる先生が入っていらっしゃるが、不登校の一人一人の理由や原因が本当にばらばらであり、昔であれば友達との人間関係から学校に行けないよというのが多かったようだが、ちょっとトラブルがあったから学校に行きたくないんだという、余りはっきりした原因がないほうが多いので、別室には子どもに寄り添って話をしたり、保護者の声を聴くことができる中枢になる先生が１人必要である。例えば、毎回担当が違う、今空き時間だからいるけどもう行かなきゃいけないという方に対応されるより、きちんと１人いるということが大事なのかなと思う。先ほど予算づけがされるだろうということだったので安心はしているが、学校もそれをすごく大きい問題として捉えている。小学校は割と学校に行っていろいろな先生と別室で過ごせる子がいるみたいだが、中学校になると人数が増えるので、そういった部分でもきちんと話を聴いたり、居場所ができてこれることがまず大事なので、そういった空間をつくれる方を配置していただきたい。

市　長　　学校の施設の修繕については、学校は全部一括管理に移行するため、その業者が定期的に学校へ見に行き、その場で修繕をするような状態にする。よってこの問題は学校の先生の負担から外れる状態になり、学校の先生の仕事ではなくなるので、ここは大きく改善されると思う。

教育長　　トイレ掃除については、基本全部は児童生徒にやらせているが、小学校だと、例えば洋式トイレが埃まみれになっていたところがあったりする。やっぱり学年によっては十分掃除ができていないところもある。

市　長　　市役所の清掃を頼んでいる企業に聞いてみるとよいかもしれない。

トイレ清掃については、プロがやるレベルと、自分たちがやれるレベルとは全く違うため、とても効率よくやっている。しかし、思っているよりも高度な知識が必要ではあるが、それは身につけてしまうととても楽になる。こういうふうにしてくださいとプロの方から適切なアドバイスをしてもらえるとよいのではないか。

教育長　　きれいにやっている学校もあったので、全部が全部というわけではない。

市　長　　それは多分指導されている先生が、ちゃんとした知識をちゃんと勉強されて指導されている。しかし全部の学校がなかなかそうならない。

教育長　　トイレ掃除の問題は、今後改善を考える。

市　長　　不登校については、別室の担当教員の方を置くとして、この方の負担も結構多くなる。今の子は本当に多様な状態になっているが、中にはとても深刻で家庭環境的に自分ではどうしようもできないような問題を抱えている子もいる。その子自身では絶対脱出できないので、誰かが本当にそれを聴いてあげて突破口を開いていかないとなかなか難しいのかなと。子どもの問題だけではなく、その子が抱えている家庭のほうの問題を解決していかないと本来は解決しない。学校側でこの子はこういう家庭的な問題を抱えているということになった場合に、市役所側に重層的支援体制という福祉の専門チームをつくった状態で、家庭に寄り添えるような体制に来年度からしていくので、それに学校の別室の先生が連携していただけると、全体として本当の解決に向かっていけるのかなと思う。ただ、この先生には負担が相当かかるので、この先生が潰れてしまわないか自分としては心配である。

教育長　　タブレットについては、先生が持ち帰らせて、何を子どもたちにやらしたらいいかっていうのが見えてない。

市　長　　少なくとも学級閉鎖されたときには持ち帰って活用すること、そこまでは最低限やるというルールづけをして、うまくいかなくても別に構わない、取りあえずやってみる。確かに学級閉鎖なんて元気な子たちからすると、何もない状態で家にいるのでその時間の過ごし方も難しくなる。

教育長　　今の話は校長会でＩＣＴ検討会とかをやるよという話が出ていたと

思うが、それは校長会でやるような内容ではないと思うので、今の話は教頭なのか校務なのか分からないが、教頭先生以下の方々に伝える。

支援室長　インフルエンザで一斉に休みのときに、例えばそういった課題が出たとすると、罹患してできない子に差ができてしまうことを、多分学校は心配しているため課題を出してないとも考えられる。

市　長　さっき委員がおっしゃったように、授業は展開せずに、先生とこういう状態でこの１日を過ごしてくださいと15分か20分でもその時間帯だけでも、リモートで、朝の会みたいな形のイメージで子どもとつながる。授業の１時間目の開始時間に必ず行われるとなると、その時間に起きて少なくともちゃんとした格好で座っていないといけない。そんな程度でもいいのでつながりがあったほうがいいということは考える必要があるのではないか。そうするとその１日のリズムを少なくとも、そこで保てる状態になる。確かに休んでいた子をどうやってフォローするのか、そういう時間がなかなかつくれないという悩みは先生方に絶対生じる。

委　員　でも通常においても怪我をしたり、風邪が長引たりしてお休みするということは通常あることなので、インフルエンザとか学級閉鎖の時間だけを特殊に扱い、そこに差ができると考えるのはちょっと考え過ぎかと思う。通常のお休みの子にも差はできるので。

市　長　学級閉鎖中は、集団的学級として運営してないときだから、前に進むのはよろしくないかもしれない。しかし、みんなが苦手なところだけ戻って学習しましょうというのはやってみてもよいのではないか。

委　員　そういうやり方に特段問題はないのかなと思う。元気な子どもたちのためにそこも柔軟に考える必要性がある。

市　長　この話を校長先生たちと共有して、タブレット活用の道をつくってもらいたい。

コミュニティースクールについては自分の考えはさっきと同じで、基本的にはこうすべきだということを基本的にしないほうがよい。学校によってやり方が違う状態が望ましいのかなと。これは町内の運営もその地域ごとに全く違う。それはそれぞれの学校だとか地域で地域性が全く違うため、豊明市の場合には、町内会の加入率も、60％を割っているところから、98％ぐらいのところもあり、相当違う状態であ

る。そういった形で、もうちょっと見守っていきたいなと思う。

委　員　　外国籍の子どもたちが今すごく増えていて、初期指導がもう満タン状態というふうに聞いている。結局もう基礎的な指導だけで、そのまま学校に戻ったりするということで、そのあとの支援も僅か週に数時間できるかできないかということのようである。あと発達障害と、日本語ができないということを混同されている先生方もいらっしゃるようで、大人の日本語教室に来ている子どもたちが時々支援級のところにいるので、見極めが難しいのかなと思うが、どうしたらいいかちょっと分からない。

日本語教育の知識を持った先生方が少ないのではないかということで、やっぱりいろいろな知識がないとその指導方法が少し誤った方向にいくのではないかと心配をしている。幼稚園、保育園から上がり、小学校、中学校、高校となったときに、その子がどういう、どれぐらいのレベルでというのを把握するのに、100人以上の子どもたちを１人２人の日本語指導専門員で見るということが本当にいいのか。もう少しちゃんと日本で暮らす子どもに、将来進学とかがついて回るのに、何となくその上部だけの支援だけではいけないのではないかなと思っている。だからその子がどういう形で、どれぐらいのレベルで、今はどんなというのを少し把握はしてらっしゃるとは思うが、もう少しきちっと、小人数ではなくて、それは多分外国籍でも発達障害でも、不登校でも必要なことだが、片手間でやる仕事ではないので、もっと真剣に全ての分野で考えていくような何かそういう部署のようなところがあるといいなと思ってしまう。

教育支援センターについては、学校との連携のことだけでなく、ちょっとうまく言えないが、少し誇りを持って、強い意志で、１人の子どもの将来が左右されるようなこともいっぱいあるので、相手がどうだとかじゃなくて、自分たちでできるものを模索していく方法を考えてみてもらってもいいのではないかなというふうには思う。

市長と話そう会の資料を見せていただいたがとてもいいことであるといつも思っている。それはそういう機会があるということで子どもたちが、自分たちの声が直接市長に届く、行政に届く、それがやれることはやるけれどもやれないことの理由とか、意味づけとか位置づけとかそういうことも、子どもたちに直接話してくださっているので、多分何もしないよりは、自分たちの住んでいるまちづくりとか、それから行政に対してそれから社会に対しての興味とか、そういうのが出てくるので、とてもすばらしい取組みであるといつも思う。お金の要ることがたくさんある教育関係だが、ぜひ今後ともご支援をお願いしたい。

市　長　　ソフト部分を充実させようとすると人が必要である。この特殊な分野である日本語指導のコーディネートの部分は、今来ていただいている日本語指導専門員の方自身が問題意識の高い状態でやっていただいているので、意識がそうでない方を入れたところで多分チームとして機能しないと思っている。恐らく委員がおっしゃるように外国人の人口だけが増え続けているまちになっているので、外国人の子どもたちの数が減るっていう見込みは全くない状況である。ただここの部分は間違いなく、強化していかないといけないと思う。国際交流協会の皆様も含めて、初期指導をやっていらっしゃるプラスエデュケートのほうにも、長期的な視点に立って、人材雇用ができる体制としてやっていただく必要がある。そうでないと、今かなりの部分はプラスエデュケートが背負っている状態になっているので、これ以上やれませんといきなりなってしまうと、他市と同じように、もう全く日本語ができない子を授業の中に放り出してしまうことになる。それは絶対に避けたいという思いで、今現在あるので、少しずつだが、慌てずに、しっかりやれる方を、順番にこのチームの中に取り込んでいくという状態にしていく必要がある。これについては、もう予算は全く意識しなくてよいという形で、事業としてはやっていきたいと思っている。

フレンドひまわりについては、フレンドひまわりで全部を抱え込むのは難しい。校内フリースクールのような別室が出てきたことにより、逆にフリーのひまわりの役割もはっきりしてくるのかなと。そこの境界線があいまいになっているため、逆に先生方は迷いながらフレンドひまわりを運営されているのかもしれない。別室に行く手前のかけ橋だというような割りきりが正しいのかもしれないし、別室に行く前に、フルにフレンドひまわりに通う必要もなく１ヶ月だけフレンドひまわりに通うだけでも良いと思う。自分も全然専門家でないので分からないが、こうあるべきということもなく、フレンドひまわりの役割が、より改善されていけばいいのかなと思う。

中学生との意見交換会はとても助かっている。生徒は全く遠慮なくストレートに言ってくれる。栄中学校の体育館で雨漏りしており、いつもそこの部分が使えないと生徒は言ってくれて、自分は雨漏りのことは全然知らなかった。学校側は施設整備のお金が学校に一定で割り振られた状態で、優先順位が高いものが他にもあるので後回しにしていたようだ。やはり生徒から直接言ってもらわないと分からないことがある。だからそれは本当にありがたい状態である。生徒たちがこのまちに何を望んでいるのか、そういったこともよく分かる。毎年出るのは、大型商業施設がほしいという声。豊明から半径６キロメートルのところで、赤池と東郷町、大高と東浦と大型のショッピングセンターが四つある。多すぎるので将来はどれかが潰れてしまうだろうと思

っていること、それから大型のショッピングセンターがあると交通渋滞が起きてとても不便なまちになることや、小さいスーパーが潰れてしまい、それで生活する人たちは生活できなくなるので、だからわざと呼び込まないと説明する。そういったことを説明すると、生徒たちはちゃんと理解される。栄中学校の生徒からは、「新しいカギ」というフジテレビでやっている番組の学校かくれんぼという企画に応募したいが、応募者がとても多いので自分たちが応募してもスルーされるので、市長から応募してほしいと言われ、学校も教育長もオッケーだったので応募したが採用されるかわからない。ただ市長が応募することは、なかなかないと思うので、採用されたらいいなと願っている。生徒が何を本当に望んでいるか、どういった立ち位置でふだん生活されているのかわからないので、「市長と話そう会」をやめるということはもう選択肢には全くない。やらないと逆に不安であり、１年間やらないと子どもたちがどういうふうに考えているのか自分たちはわからなくなってしまう。

委　員　　子どもたちは大人目線とは違う。ひょっとしたら各世代でやられたらどうか。市が開催する会議や審議会というのは、大体似たようなメンバーの方が多いが、そうじゃない若い世代やいろいろな世代の間で考えが違うし、それが100％正しいとは言えないと思うし、世代間のギャップもあるかもしれない。いろいろな世代の意見というのを聴く機会があるといいなと思う。あと先ほどのコミュニティースクールでもそうだが、やっぱり「せねばならない」というものほど窮屈なものはなくて、世代が下がれば下がるほど組織にはまらずに自由な活動をしたいと思っている。自由にやってとか、出られるときにやってとか、無責任であってはいけないけれど、国際交流についても絶対出なければならないということがなくて、日本語教室でも休んでもいいよと、ボランティアさんに出られるときに出てくだされば いいよという話をしているので、やめる方はほとんどいない。ちょっと若い世代の人たちも時々活動に参加しており、市民課の職員もベトナム語、ポルトガル語講座に多数参加してくれている。自分たちの窓口業務の何かに役に立てばということで、講座も参加してくれているので、市全体に外国籍の人たちへの思いやりみたいなものが伝わるといいなと思う。

市　長　　ひとつ自分から感謝したいことは、他の自治体では未だに外国人の居住者と日本人の間でトラブルがある。しかし、市長への手紙で外国人の居住のことについての苦情は、過去５年間で2,500通ぐらい届く市長への手紙の中で一通もない。外国人の苦情がないという自治体はなかなかない。だから豊明市は住みやすいなと外国人に選ばれている状

態であると思う。それは国際交流協会が大分貢献されてきて、そういう空気感になっている。

委　員　　多分「せねばならない」でやっていないので、結構皆さん楽しんでやっている。

市　長　　そうしてやっていただいているのがよかったのだと思う。外国人の方がいらっしゃることが、何か当たり前になってきている状態になっている。だからそれは日本語指導を子どもたちについてやれることを前提としていかないと、多分同じ状態にはならない。彼らの教育水準が下がって、彼らが不満を持ってくるとなかなか社会に溶け込めなくなり、そこの問題はちゃんとクリアしていかないといけない。今のままで満足してしまうと駄目になっていくのかなと思う。

委　員　　部活動の話について、いろいろと委員会などで検討されているし、その方向性も定めてやっているのは理解できるが、外から見ていると、先生が、働き方改革でという視点が強過ぎるのではと思う。先ほどの中学生との市長と話そう会でも、入りたかったのに廃部になってしまったという意見があったので、もう少し子ども目線での検討の方向があってもいいなと感じる。ただ、今解決への答えを持っているわけではないためこうしてくださいという意見はないが、部活の地域移行については、課題が多いかなと感じている。

図書館が工事の関係で受付ができないから貸し出せないとなっていたので、共生交流プラザカラットでやったらどうかと言ったら、ネットワークが違うからできないということがあった。カラットでも図書館の予約の受付とかをできるように連携をしたらもっといいのにと思う。せっかく図書館の工事を今やっているので、また元に戻すのではなく、図書館2.0ぐらいの勢いで、そもそも豊明の図書館はどうあるべきかということをこの機会に議論してもいいのかなと思った。ちょうど、この市役所の旧中央公民館と図書館とカラットのこのベルト地帯を何かうまく活かせないかなと感じている。

子どもたちのタブレットの活用だけでなく、スマホの使い方の指導や生成ＡＩとの付き合い方や、ディープフェイクの画像や動画が出てきたときに子どもたちがそれとどう関わっていくのかということをしっかりどこかで決めておかないと、危ないことなのではと感じている。

市　長　　図書館そのものの議論は、実は何年か前に三崎小学校の子どもたちを対象に行っている。これは意思決定済みで、豊明中学校から建て替

えをしていくときに、図書館全部と三崎小学校と閉館したままの二村児童館も学校の中に入れ込んだ状態にする。この四つの施設が、ちょうど豊明中学校の今の校舎スペースのあたりで建て替えた状態で、図書館は今よりもはるかに充実させるということまでは、意思決定済みになっている。図書館の建て替え時期が決まっている状態になっており、図書館は学校の子たちも使う状態で運営される場となる。どこの入り口がどういうふうになるのか。どういった増床がいいのか。どういった空間が、小中学生が１番のメインで使う状態で、ほとんどずっとそこが居場所になっていらっしゃる高齢者の方々も、当たり前にそこにいる状態になる。小さい子ども連れのお母さん方も、そこで休みながら子どもたちに読み聞かせをするような空間になるので、それぞれ違う方々がいらっしゃる空間になる。だから議論しないと、そもそも成り立たない図書館になっていくと思うので、そういった視点でこの図書館の建て替えをやっていかないといけない。

教育部長　図書館の予約システムの端末については、今の時代だとクラウド管理でしてスマホでやれるかと思うが、導入したときはまだその辺も確立しないシステムを導入しているため、今それに切り替えると市長が言われた建てかえとの関係があり、システムに投資すべきかどうかという問題が出てきてしまう。今回はトイレ改修で１か月程度だったので閉館で対応した。

市　長　基本的には閉館しない方向で何とか工事をやる予定だったが、契約の業者が決まったところで、細かいところを詰めていくとやっぱり閉館しないとそのスペースをとって安全に工事できないということが分かり、閉館する状態になってしまった。今回の図書館の工事はちょっと後手に回ってしまい、また南部公民館も工事しているタイミングでこれが行われてしまったため、大分きつい苦情が自分のところにも寄せられた。これには相当の不満が出ている。図書館再オープン時に何か面白いイベントをやれないかと図書館長に伝える。

部活は難しい問題であると考えている。ある私立高校の方々から聞いた話では、全国的なレベルの指導者が学校に何人かいるが、その先生方の働き方改革で、その先生が部活を全部見るというのを無くしていっている。でも、生徒はその指導者を慕って学校に通ってきているので生徒への裏切りになってしまうし、先生もやりたくて仕方ないが、無理やりでも外させないと今の時代からして、その先生が病気になってしまったときに学校が持ちこたえられないという問題を抱えていてせめぎ合いになっていると聞いた。私立の高校でもそういう問題が生じている。なかなか学校の先生の働き方改革は、一定程度平行し

た状態でこの問題を解決していかないと、結局は解決に結びつかないのではと思っている。

教育長　　アンケートを見る限りでは、学校の先生の大半は部活からは少し離れたい意識がある。やりたい先生はごく少数である。今年はある団体が部活動を全部やってくれるという話があったが、急になくなってしまい、急遽話が変わってしまった。さらに市の学校教育課と学校支援室の課長が異動になり、新任の課長になったため、今までの流れがよく分からないということでもたついた期間があったが、夏過ぎぐらいからようやく飲み込めてきて、学校と協議しながらやっているところである。部活動については委員の皆様からも教育委員会でいろいろと厳しいご指摘をいただいているが、来年の春には小学校にも部活がいよいよなくなるという連絡をし、その代わり違う形で子どもたちの体を動かすような、放課後子ども教室の部活版みたいなことを継続してやるということを通知する予定である。

委　員　　ただそのときにお金の問題とかで、やりたいのにやれないという格差が出ないようにしてほしい。

教育長　　お金の問題は１番悩ましい問題で、今どこの市町でもお金がかかる。ある市は５年間で５億円使うと聞いている。もちろん受益者負担も一定程度必要であり、払えない方や要保護・準要保護の方は市のほうで面倒見るとは言いながらも、それ以外の例えば道具などでお金がかかるものだから難しい問題であると感じている。

委　員　　部活動については、保護者のほうももう見守っているというか、言いたいことは多分たくさんあって、過去で言えば、部活動の結果などが高校進学に関わるようなそういったことはどうなるのかとなど、いろいろな情報が保護者に向かって出されていない。検討委員会で話していることが、ちらっと出てきて、「はい」って言うしかないという現状になっている。これも全国的な話で地域的なものではなくて、だからもうしょうがないのかなっていうふうに保護者も子どもたちも受け止めている現状である。小学生の子たちは余り気にしてないが、中学生の子たちは、大会に向かって試合をしたり、部活動を居場所としている子もいて、学校授業はあんまり行かないけど部活が始まる時間になると来るみたいな子もいたり、いろいろな意味で部活を利用している。部活動から関係性ができることだったり先生との関係性だったりということを、子どもたちは大人が思っているよりも実は大切にしているが、その場がなくなってしまうだろうと思っている。なくなる

のだけど突然こうだったらどうですかというようなアンケートとかが来るので、部活動はどうにかなってしまうのだね、どうなっていくのだろう、でもそれもしょうがないことだよねというのも子どもたちはわかっているのが現実。それはそれで新たな環境でやっていくのも、子どもたちの力にもなるのではというふうにしか保護者も言えない部分があるが、やっぱり情報はしっかりとおろしてほしいなということと、やっぱりその都度、子どもの感覚は忘れずにいてほしい。先生の働き方改革が余りにもちょっと大きい気がする。もうちょっと学校側も、入りたかったのに廃部になっていたというのも、小学校６年生の子たちはその部活がなくなるなんて入学するまで知らなくて、もし入学前の小学校６年生の入部人数がたくさんいたら続けてくれたのかとかその辺も何かぐちゃぐちゃな状態。そこは子どもの気持ちを一切聞かなかったのかなと思うような場面もあったので、少し子どものことにも寄り添ってほしい。部活動も大分時間が減っており、ほとんどの学校が５時で終わるので、部活といっても2、30分くらいやって帰ることになるので、時間についても子どもたちは実際のところ残念がってはいる。でも、しょうがないと受け止めている子どもたちの大人な気持ちをもうちょっと先生方に酌んでいただけたら、保護者や子どもたちが意外と大人だよっていうことを、先生方に受け止めてほしいと思っている。先生方も、「試合会場が遠いんだよね」などと言ったりするところがあるようなので、あまりそういうことは子どもの前では言わずに受け止めていただきたいと思う。

市　長　　予算はつけたい。実際には大きな事業を先送りして何とか来年度の予算を組んでいるが、今の話を聞くと予算でやれる範囲はやり切らないといけない。外にお願いする場合に、人材の問題が、結局はそこに行き着く。人材がいればお金で何とか解決できる問題ではあると思う。学校の生徒にも説明したが、先生がそもそも不足しており学校の運営ができなくなってしまうので、今の働き方改革はかなり強引にやっている。それぐらい深刻に、ちょうど退職される方が大量に出る時期と学校の先生方のこの働き方が異常な状態だという情報がマッチした状態で、学校の先生になろうとしなくなってしまう。今の学校に週５日行っているというシステムがそもそも崩れ出している状態。そのうち週４日になるのではと思っている。学校運営することをどういうふうにやっていくのか。一方では、35人学級にしてさらに30人学級、さらに学校の先生が足りなくなるがどうするのか。

委　員　　小さい小規模の各地方の学校だと、20人、10人ぐらいしか１クラスにいないというところもある。大きい規模の学校と小さい規模の学校

の格差があり過ぎる。

市　長　　学級の人数が少な過ぎると刺激も少なくなるので、やっぱり勉学の習熟度にも影響が及んでしまう。

委　員　　タブレットについてはもちろんどんどん使うべきだが、簡単に調べられるので、体験もせずに分かっちゃうようなこともちょっと心配している。例えば、中学校の日本語会話教室の支援の時に分からないことをすぐに検索して、分からないことはこれと生徒が言うのは便利である一方、分からないから一生懸命説明をしようとする努力をするのではなく、それは日本の子どもたちでもそうだと思うが、物を調べるのではなくて検索してこれだというのが余りにもどうなのかと。大人になって検索の必要な情報量をたくさん必要とする人たちには、もちろんとてもいいことなのだろうが、それをうまく使える子どもたちを育てていかないと、実体験とか自然に触れるとかそういうことをせずに何か大人になり、分からないことが増えていく心配をちょっとしている。なるべく土にまみれたり、泥んこだったりという経験をしていない子どもたちが大人になって、その子どもたちをどうやって育てていくのか。もちろん、ずっと都会で暮らした人たちはそうやってきたと思うが、私みたいに田舎で育ったものにすればとても不安で、時々高校生と花を植える活動をやっていると大丈夫かなと思うときがある。土に触ることなどそういうことがなかなか苦手な子もいるそうで、もちろんそれはもう個人差もあり、昔でも泥んこ遊びが嫌いな子どもも多分いたとは思うが、全体的にそういう子どもたちが増えて、目の前の便利なものだけに、何かこう流れていく。ちょっとうまくつき合っていかないといけないのかなと時々そう思う。

市　長　　同感です。今確かにおっしゃるとおり、うちの子どもも６歳で自分よりもはるかにスピーディーにスマホを使って検索している。ユーチューブで勝手に検索して勝手に見ている。あと、フェイク動画は簡単に作ることができるということが分かってしまっているので、新たないじめの方法となってしまう。

委　員　　フェイク動画が友達同士で流れていたりすることがある。フェイクかどうかの判別がつかないので本人が言うか言わないか。

市　長　　人間関係がとても濃い子たちなら、あの子がそんなこと言うはずないとかは分かるが、中途半端な距離の人間関係だと、そういったことが本当なのかはわかりにくいと思う。本当かどうかを確認もしない

し、「この人はそうなんだ、この人自分のことを悪口言っているんだ」というふうに捉えてしまう。それで多分その人間関係はそのままずっとになってしまい、それが終わってしまうか続いてしまうかはわからないが、結構恐ろしいと感じる。結構早くにこの問題は広がっていくと思う。

委　員　　そういうモラル教育も大事で、そういう真実が何だということのための正しい知識をちゃんと勉強しなくてはいけないので、しっかりそこを教えていかないといけない。

委　員　　本来的には家庭がそういうことを教えていかないといけないが、学校にはすごくいろいろな家庭が集まっているので、家庭でなかなかそういうことを教えるということができないご家庭の子どもと友達になり、一緒になって使うということもある。そう思うと申し訳ないと思いつつも、学校で子どもたち全員に直接伝えてほしいという思いが、保護者としてはある。

委　員　　私たちの子どものときも、それから自分の子どももそうなのだが、私たち親が言うより、学校の先生がこう言っていたよということのほうがよく頭に入ると思う。ちょっと時代が違うかもしれないが、みんなの前で先生がこう言っていたからこういうことは駄目なんだとか、学校の先生から聞いたりするとそういうことなのだと。低学年は特に言われたことは信じるというのがまだある。家庭だけの問題ではなく、ＳＮＳなどの問題は学校でやるべきでないという意見もあるかもしれないが、どこかで本当にきちんとやったほうがいいと思う。

支援室長　　毎年どの学校でもスマホ安全教室を一般企業のプロの方に頼んでやっている。

委　員　　ただ何げないことがこの先こんなになってしまうのだという、ある意味恐ろしさみたいなのも、教えていかなければいけないと思う。ありきたりのことだけではなくて。

教育長　　それこそ闇バイトについても、中学生ぐらいから教えていかないと、簡単にスマホで参加して、犯罪が多発するということは現実的にあると思う。

委　員　　先ほどの自然の中での実体験について、今子どもたちが外遊びをしない。だからというわけではないかもしれないが、やはり創意工夫が

できない。大学生になったときに、創意工夫ができなくて、問題にぶち当たったときに次これやってみよう、あれやってみようと、今こういう状況だからやってみようかということが考えられない。そこは多分子ども時代にそういう自然の中で、自分の思いどおりにならない自然の中で生きていく力というのが、大分衰えているというふうに感じるので、そういう意味でも、豊明の中で自然に触れて遊べるような場所をしっかり残してほしいというのを、いつも要望として言っている。

委　員　　何かこれがないと何もできないと思っているようで、これがないから、かわりにこれを使えないかという発想がなかなかできない。何かそういう時間をたくさん取ることができればいいが、学校はいろいろと忙しいかもしれない。まだ豊明は自然が豊かなので、極力そういう場面があるといいと思う。

市　長　　では皆様からご意見いただきましたので、これで閉めたいと思います。活発なご意見ありがとうございました。それでは本日の総合教育会議を終了させていただきます。ありがとうございました。